

『感染症と文明——共生への道』(岩波新書)

山本 太郎 著

目次／プロローグ 島の流行が語ること／第一章 文明は感染症の「ゆりかご」であった／第二章 歴史の中の感染症／第三章 近代世界システムと感染症—旧世界と新世界の遭遇／第四章 生態学から見た近代医学／第五章 「開発」と感染症／第六章 姿を消した感染症／エピローグ 共生への道／付録 麻疹流行の数理／あとがきに代えて／参考文献

今年三月十一日、震災特集が続く紙面に「感染症と社会 目指すべきは「共存」」(朝日新聞)があった。人間に死をもたらすウイルスであっても、撲滅より「共存」「共生」を目指したいという考えが、患者を救うことが役割である医師のジレンマとともに語られていた。

記事の主が本書の著者である長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授である。ハイチやアフリカで感染症対策に従事し、東日本大震災では救援活動を行い、その最中に本書は書かれている。新型コロナウイルス禍の影響なのか、し

ばらく品切れであったが、この四月に重版された。

ウイルスを根絶しても新たな感染症が発生する。「人類にとって決してここちよいものでないとしても」(15頁)ウイルスとの共生が必要な理由を、歴史を辿りながら著者は述べる。ウイルスを撲滅しようとするのと抵抗力をもち凶暴化する。根絶できても、その世界に生きる人間は新たなウイルスへの抵抗力が弱い。人間の都合の良いようにはいかない。ウイルスも人間と同じ生物なのだ。最後に著者は、津波被災地の海で本書を振り返る。

「心地よくない妥協の産物だとしても、共生なくして、私たち人類の未来はないと信じている。地球環境に対しても、ヒト以外の生物の所作である感染症に対しても」(202頁)。悲しみの場で著者が導き出した言葉である。

自然災害でも感染症でも、災禍をくぐった社会の方が未経験の社会より強い。しかし、そこには犠牲が生じる。新たな災禍にいかにか備えるか、犠牲を最小限にできるのか現在の防災・減災の考え方だ。本書にはこれからの人間の生き方を示すヒントがある。

(御手洗隆明)

(岩波書店、二〇二一年六月、七二〇円+税)